

## 安井てつと日本の幼児教育

宮田幸枝

(東京都立大学大学院)

はじめに

前回の大会では、安井てつ(1870~1946)のイギリス留学中(1897~1900)における、イギリスの幼児教育機関、保母養成所、家庭教育を見聞しての考察の内実について報告した。当時、19世紀後半イギリスでは、フレーベル運動が展開されていた。彼女は、その考察を踏まえ、イギリス幼児教育実態を日本へ紹介する(1901年)が、それは、イギリス幼児教育の実態を実際に見聞しての紹介としては、先駆的なものであった。今回の報告では、前回の報告を受け、その実態把握を踏まえての日本における彼女の幼児教育実践(1910~1917)の内実について報告したい。そして、彼女の当時のイギリス幼児教育理論を把握した上ででの日本での実践が、日本の幼児教育においてどのような意味を持っていたかを考える手がかりを得たい。

安井は、東京女子師範学校(後の東京女子高等師範学校)で学び、イギリス留学、東京女子高等師範学校附属幼稚園主事などを経て、戦前女子にとっての高等教育機関であった東京女子大学の学長(1923~1940)をつとめた人物である。彼女は、そこで自然科学にいち早く取り組み、男女共学制にも関心を寄せるなど、男女別体系で教育機会上の差別が著しかった戦前女子高等教育の拡充に一定の役割を果たした。本報告では、彼女の日本での幼児教育実践を明らかにしていくことで、彼女の女子高等教育者としての側面だけでなく、今まで先行研究で詳細に取り上げられることのなかった幼児教育者としての側面も浮き彫りにしていきたい。

### (1) 幼稚園教育と保母養成

安井は、1910年、当時東京女子高等師範学校校長であった中川謙二郎の勧めもあって、東京女子高等師範学校附属幼稚園主事となり、1917年まで、その職務に従事する。その傍ら、彼女は、東京女子高等師範学校教授として学生に保育などを教え、教育実習生の指導にもあたった。

当時の日本では、幼稚園の大衆化は必ずしも進んでいるとはいえず、「国全体の幼児教育に対するモデル的な先駆」といわれた東京女子高等師範学校附属幼稚園も、上流階級の家庭の子どもなどが通園していた。同幼稚園では、安井が主事に就任する前、明治半ばか

ら後期にかけて、東京女子高等師範学校の中村五六、和田実等が指導者となって、従来の恩物中心の幼児教育に対し批判を行い、子どもの遊戯の生活を中心とした幼児教育論を展開していた。<sup>(1)</sup>そして、安井が主事となって1年後の1911年には、「小学校令施行規則」が改正され、幼稚園に関する規定のうち保育項目の内容規定が削られ、幼稚園の裁量に委ねられる部分が増した。

では、この時期、和田等に続き、安井は、イギリスの幼稚園教育の見聞・考察を踏まえ、どのような幼稚園教育を行ったのであろうか。安井によると、留学時イギリスの幼稚園の保育上の注意点は、幼児の「想像力」を生かし、自主性を重んじることであった。このこともあり、日本で、彼女は、幼児の「自発性を最も尊重」した幼稚園教育を行う。その実践について、安井が主事をしていた当時、東京女子高等師範学校の児童心理学の講師で、日本の近代的な幼児教育思想の確立に貢献したといわれる倉橋惣三(1882~1955)は、次のように述べる。彼は、安井の後に東京女子高等師範学校附属幼稚園主事になった人物でもある。

「安井主事は英国帰りの新しい着眼点を以て、種々の改革を実行していた。その物静かな中に、徐々に行っていた新しいことは、彼も蔭ながら感服していた。幼児に歌わせる歌などに、古くさいものから改められたものも少なくなかったと思う。恩物使用は、大昔ほどではないが、行われているらしかったけれども、自由遊びの尊重は十分行われていた。……明治9年創立というこの幼稚園も、古いしきりだけにとどまっていたのでは、決してない。」<sup>(2)</sup>

ただ、倉橋は、安井の実践を全面的に評価していたわけではない。<sup>(3)</sup>

その他、安井は、自然物を利用した遊び(1916年)、「鉢ち植えの空豆や櫻草や百合」の「一斉の世話が皆園児各自の手に依つて施」(1917年)すこと<sup>(4)</sup>を実施した。こうした実践は、「英吉利の家庭や、幼稚園で毎日子供に……小鳥や、家畜や、植物のために自分が手を下して、やさしく世話をしやるといふ習慣をつける事は誠に美しい事」という彼女の考えに少なからず影響されていたと思われる。1926年に公布され

た「幼稚園令」では、保育項目に新たに「観察」が加えられたが、それに先立って、安井は、室内での恩物中心の幼児教育に対し、自然物に接する幼児教育に取り組んでいた。

また、安井は、保母養成については、次のように述べる。

「普通保母になる資格のあるものと申しますと、府県立の師範卒業生は凡て無試験で、保母となる事が出来るやうになつて居ります。その他は高女卒業生でも、又は小学校だけでも保母養成所或は伝習所等によつて資格を得る事は容易であります。しかし私共の理想から申しますと、少なくとも、高師卒業程度くらいの、高等教育を受けた人々が、進んで保育事業に従事するやうになつて欲しいと思ひます。今までの保母は……出勤の時間だけに間違ひが無ければ、其の他幼児の心理状態等に就て、余り細かい注意を配らないといふので、これが為に往々幼稚園教育の弊害が起つたのであります。」<sup>(5)</sup>

安井は、心理学などを教え「技術のみならず、保育の原理」を学ばせるイギリスの保母養成所を見学したこともあってか、日本において「幼児の心理状態等」について専門的知識を備えた保母養成を唱える。実際、彼女は、大学の教授に依頼して、保母となる学生に、比較心理学などの講義を聞かせたとされる。

彼女は、幼稚園主時期、幼稚園を「家庭の不準備と無計画なるを補はん」施設だとし、そこで「愉快な共同生活をなさしめ」、「智識を詰め込む」のではなく、「愉快に遊ぶ間に、盛んなる児童の好奇心を満足させ」ようと考えていた。<sup>(6)</sup> では、安井は、家庭の教育に関してはどのように考え、それに取り組んでいたのだろうか。

## (2) 家庭教育と母の役割

1900年代初め、日本では、「家庭」の名を付した雑誌が数多く出版され、家庭・家庭教育への関心が高まっていた。1901年には、幼稚園関係者に限らず家庭の女性をも対象とした『婦人と子ども』が創刊された。

この時期、イギリスの家庭見聞から家庭教育の必要を考えていた安井は、「子の教育」を「学校に一任」することが多かった「中流以上の家庭」の母親に家庭教育の必要を促した。例えば、彼女は、イギリスの母親を真似、子どもに本を読んで聞かせることを日本の母親に促した。そして、彼女は、それにより「子どもと興味を分つことが出来、相当の判断を与へ」られると説いた。<sup>(7)</sup> 安井は、当時、父親が「職業のために

全身全力を注」いでいたこともあり、母親が家庭教育を担うべきだと考えていた。

また、安井は、家庭教育の担い手であった日本の母親に、それを担っていく上での幅広い見識を求めていった。彼女は、日本の母親の教育程度として子どもに「読方書方」を教えられるだけでは不十分で、「衛生」「心理」に関する知識をもち、子どもの「相談相手」となるだけの「一層深い教育」「広い経験」が必要だと考えていた。このため、彼女は、日本の母親に、イギリスの母親を真似、読書などによる見識習得を促した。また、彼女は、将来母親となる女子の教育として、より高度な教育を求め始め、当時まだごく少数の女子しか受けていなかった高等教育の必要性を主張した。

## おわりに

安井は、イギリスの幼稚園教育見聞を踏まえ、自由主義的な幼児教育論が登場する明治末期から大正期にかけ、幼児の自発性を尊重し自然物に接する幼稚園教育の実施をただ唱えるだけでなく、実際それに取り組もうとした。また、彼女は、保母養成に関して、保母の質的向上を促した。なお、日本での実践の際、彼女は、イギリスの幼稚園で行われていた読み書きは、行わなかった。

家庭教育に関しては、彼女は、イギリスの家庭教育見聞を踏まえ、その必要性とその担い手である母親への教育改善を唱えていった。

以上のことなどから、安井は、イギリス幼児教育の実態把握を踏まえ、日本において、保育内容のみならず、保育者の質的向上を促そうと試みたのではないか。

## (脚)

- (1) 小林恵子「日本の幼児保育の歴史」岡田正章編『世界の幼児教育2 日本』日本らいぶらり 1983
- (2) (3) 倉橋惣三「保育理論研究者 子供讃歌」1954年『倉橋惣三選集』第1巻 フレーベル館 1965
- (4) 「幼稚園参観記 東京女子高等師範学校付属幼稚園」『児童』第1巻 児童教育研究所 1917
- (5) 「保母になる迄」『婦人週報』2-51 婦人週報社 1916
- (6) 「幼稚園の本質」『婦人週報』2-3 婦人週報社 1916
- (7) 「子女のために母親の修養を望む」『大和なでしこ』12-9 大日本女学会 1912